

主体美術

SHUTAI-BIJYUTSU

主体美術協会は、1964年に結成されました。
私達は作家一人一人が創作を自由に発表出来る場を確保し、美術家の
集団として積極的に活動していきたいと思ひます。
私達は世界的な視野に立つて、豊かな人間性を培いつつ、現実の日本
に深く根を下ろした生新な芸術を創造していくことを期しております。

発行：主体美術協会事務局
〒302-0001
茨城県取手市小文間4401-1
福田玲子 方 TEL / FAX 0297(72)2166



松本恵美 「風にのって」

2018.2 No.102 CONTENTS

- 1p 巻頭言 ……福田 玲子
- 2p **第53回主体展報告**
第53回主体展審査について
……………吉田 正
- 3p 第53回主体展陳列について
……………中嶋 修
第53回主体展研究部報告
……………藤田 俊哉
- 4p 巡回展報告(名古屋)
……………加藤 嘉巳
巡回展報告(神戸)
……………森 慎司
- 5p 第54回主体名古屋巡回展
中止について
……………返町 勝治
野辺田紀子さんを悼む
……………中島 佳子

- 6~8p
第53回主体展2017 研究講演会
野見山 暁治氏 講演
「森 芳雄の生きた時代」



- 9p **父・森 芳雄のこと**
……………門田 正子
- 10・11p 新会員紹介・入賞者
- 12p インフォメーション
展覧会記録
2018年第54回主体展日程
編集後記・その他

102号を迎える機関紙によせて

福田玲子

主体美術協会は創立54年目を迎えます。時代は目まぐるしく変化し、素晴らしい技術進歩により世界中がどこでも、誰とでも繋がれる便利な時代になりました。しかし、毎日変化するこの時代に焦りや空虚感を感じてしまうこともあります。そんな時、ふと読んでいた新聞に「汗で培われたものは失われない。」という言葉がありました。そしてその言葉になんとも言えない安心感と共感を覚えました。そしてそれは、同時に昨年の53回主体展特別企画展「森芳雄没後20年」に感じた感情も呼び起こしました。

創立会員であり、会を永く牽引してきた森芳雄氏が亡くなられてからもう20年になります。森氏の作品やその人柄を知らない方も多くなりつつあります。そこで、画家として私たちの先輩でもある森氏の全貌をここで改めて見てみたいという思いが昨年の特別企画展の開催へとつながりました。

久しぶりにこの主体展の会場で私たちの作品と同時に並んだ森氏の作品の数々を見た時は、感慨深いものがありました。油彩、デッサンなどの様々な作品とアトリエ内に残された愛蔵品や資料の展示からは、森芳雄という画家の世界観を改めて感じる事ができました。そして、展示会場に流れる凜とした空気や、描かれた一本の線、塗り重ねられてはまた削り取られ創りだされた作品群からは、「厳しく真剣に絵画というものに向き合っているか」と問われているようでもあり、この主体にいる私たちに大切な何かを語り掛けているようでもありました。本当に、その声が聞こえてくるようでした。

会場では、作品だけではなく、氏が残した“言葉”の数々も同時に触れることができました。その言葉は、作品に向き合う彼の魂があふれる、きらきらと輝いたものでした。その数々の言葉の前に足を止め、写し取っていく幾人もの人の光景がありました。森芳雄氏の持つ「作品を生み出す力」は、作品や言葉となってこのように色あせることなく今も人の心をとらえて離さないものなのだと思います。

その森芳雄氏も今はなく、主体も54回展を迎えます。そして半世紀以上続いてきた主体のこれまでを振り返ってみても多くの優れた画家の「作品を生み出す力」に支えられてきたことを思います。

今私たちが生きているこの時代は、手軽に自分を表現できる世界が広がり、発表できる場も多様化して、一瞬で多くの人と繋がれる時代です。そこでは誰もがアーティストになれるし、多くの人からの評価も得ることが出来ます。こうした時代の移り変わりの中で、主体も変わらなくてはならないのかもしれませんが、しかし、便利で苦勞のない時代の中で、手を絵具だらけにし、汗だくで描いた絵などは見捨てられていくのでしょうか。それはこの先誰にもわからないでしょう。ただ思うのは、時代がどんなに変化し続けようとも唯一無二の自分が培ってきた、自分にしかできない作品に対する想いや、創造性を変えてしまえばいけないということです。「作品を生み出す力」を捨ててしまわなければこの手で作りあげたものは決して失われないものと信じています。これからもそうでありたいと願っています。

第53回主体展報告



第53回主体展審査について

事務局展覧会部 吉田 正

「第53回主体展」の審査が、8月23日から25日の3日間、上野の東京都美術館で行われた。毎年この審査が始まるのを多くの会員が楽しみにしている。今回も90名近くの会員が集い、地下3階の審査室で主体展の審査が始まると、気持ちの高まりと共に独特な空気に包まれた。自分の作品が審査されるという緊張感、かつての自分もその1人であったことは間違いないが、一旦会員になってしまうとその緊張感から解放される一方で、情けないことだが、弛緩となって作品に現れることがある。新しい作家の視点や姿勢、緊張感に触れることは、今まで何気なく見過ごしていたものに対する新鮮な驚きや発見、面白さなど我々の感性を刺激させてくれるばかりでなく、ある種の反省も喚起させる。そんなことを感じる会員は、私だけではないと思う。

今回の審査を終えて考えなければならないのは、年々1点出品の作家が増えてきているということにある。以前は、1作家が3・4点作品を持ち込み、作品というよりは、その作家の仕事について審査では議論を尽くしたという印象がある。1点の作品に掛ける時間や密度は感じられても、その作家がどんな仕事をしているかは伝わりにくくなっている。作品本位という観点から善し悪しは別として、我々が作品を審査する眼も、新人賞も含めて、コンクールの入選作品を選ぶような傾向にあることは否めない。

「作家の作品を審査するということとは」どういうことなのか。同じ映画を子供の頃に観たのと、ある年齢に達したときに観たのでは、感じ方が全く

違うのと同様に、時代や年齢、個々の生まれ育った環境によって、作品に対する感じ方は様々である。作品を観て美しいと感じる心は、その観る人の心の中にあり、作品評価に相対的な基準はない。もし絵画コンクールで1点の大賞を選ぶのであれば、相対的な意識が働き、その作品の色味が好きだとか、何となくいい感じという個人的な評価も有効となるかもしれない。だが、その基準で審査される作品や作家は、他人の評価や時代の風潮に左右されるものとなり、自分らしさを失ってしまいかねないと危惧する。

では何をもち「主体美術の審査の基準」とすべきなのか…。生前1枚しか作品が売れなかったというゴッホが作品と対峙した姿勢は、世間に関係なく揺らいでいない。我々会員が見極めなければならないのは、観察力、追求心といった作家としての姿勢や継続性、妥協なく自分の作品を追い求めるブレない作家精神を読むことにあると考える。審査の中で、「魅力的な部分を評価し、会に入れて育てていく」というある会員の発言が、印象深く残っている。会として「作家を育てる」ためには、その環境や体制をつくることも不可欠である。今年から始動する主体美術の将来構想の目論みにも大いに期待したい。

今年度の審査により、佳作作家18名、秀作作家7名、新人賞2名が決定した。また、8月31日には、作品陳列に続いて新会員投票が行われ、夕方からの総会にて新たに5名の新会員が承認された。

(2017年12月)

第53回主体展陳列について

展覧会委員 中嶋 修

「一年の一番の作品を発表するのが、上野の主体展の会場である。」先輩の作家からそんな言葉を聞いたことがある。持ち寄る作品は常に新鮮なものである。朝の市場に並んだ魚、野菜などの仕入れによって、その日に供される最良の献立は決まる。前菜から主菜、最後のデザートまで、どの食材も活かしきる料亭の食事に展示は似ている。それぞれの思いのこもった作品の展示は、審査とともに最も大切なものである。

例年通り、投票により選出された展覧会委員が中心となって陳列の作業をした。8月22日搬入日初日に会員作品がすべて搬入され、撮影した出品作品の写真を均等に縮尺し印刷する。8月24日審査初日の終了後同比率に縮尺した各会員の一つ一つの紙片を展示壁面の見取り図の上に並べ、効果的な陳列を考え貼り込む。出品者の入選作は審査時に作品の傾向別に部屋割りをされる。

8月31日朝、日美により各部屋に作品が運び込まれ、見取り図通りにまず並べて、第1室から順に効果的な壁面を再考していく。午後の各種投票に展示が間に合うように、手早く決定を出したいのだけれど展示の試行錯誤がぎりぎりまで続く。キャプションの貼り付け微調整もあるが、係となった会員の協力のもと展示が完了する。

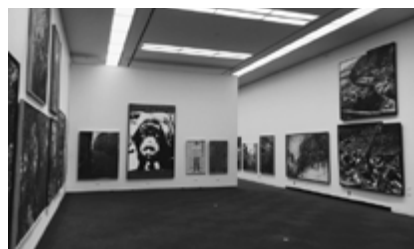
「ゆるやかな傾向別展示」として具象作品の部屋、抽象作品の部屋、混合作品の部屋を配置した。まず、入って1室と2棟目最初の6室を大きめの部屋にして、規格外展示8名を含んだ比較的大きな作品を並べ、5室に主体創立に近い作家の作品、5と6室の間に没後20年森芳雄特別展示を加えた。会員の作品の部屋に一般出品者の部屋が続く展示。昨年の反省に基づき最後の部屋を若干大きく取り抽象作品の部屋とし展示最後の部屋を明るい印象で締めた。

一般的に言う、良く見える壁、悪く見える壁を可能な限りなくすため、展示壁の突き出しを左、右と入れ替えた一本の導線をたどって蛇行する主体独特の展示であるが、森芳雄展示のみはコの字型に壁を作りあえて流れを止めた印象をつけた。

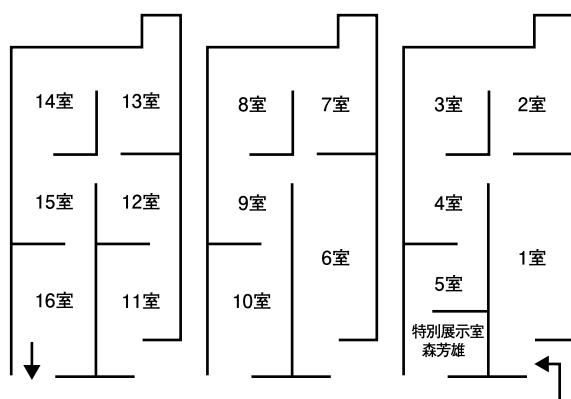
新しい作品は昨年とは違った今の顔を持っている。その顔が展示作品として集まった時、華やかな作品が力を見せ、落ち着いた作品が存在感を失わず、すべての作品の華を活かせる展示を、来年以降も上野の壁で試みるのだと思う。 (2017年12月)



1室



10室



第53回主体展研究部報告

(2017年12月)

研究部 藤田 俊哉

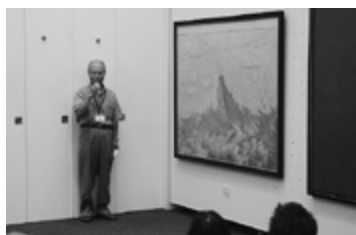
アーティストトーク 9月1日(金)



水野

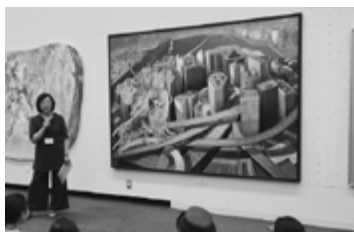


見藤



栗崎

アーティストトーク 9月11日(日)



石井



保坂



有馬

■本展会期中イベントの「アーティストトーク」「会場研究会」について。

今年4年目を迎えるアーティストトークだが、会期中に2度開催、1回約1時間で3名の会員に自作のテーマや制作の周辺について語っていただく試み、すっかり定着してきたのではないだろうか。毎回60名～80名近い来場者を集め、今年も賑やかに2回のトークイベントを行えた。

9月1日(金)は展覧会初日だけあって、全国から多数の来場者の見守る中、地方からの会員である水野博子・見藤瞬治・栗崎進一の3氏にお話をいただいた。作品のテーマ、作家としての来し方行く末、各人各様の興味深いお話が展開された。毎回思うことだが、作者の言葉、そしてパーソナリティーが目の前の作品をぐっと身近に感じさせてくれる。これが作家本人によるトークの醍醐味である。それは11日(日)の2回目、石井晴子・保坂淳・有馬久二の首都圏会員各氏の時も同様である。時にユーモアを交え、皆さんなかなかの話し上手で会場も沸いた。

続けて開催の会場研究会、これももう長年恒例のイベントだが、研究部としては「あまり堅苦しくならないよう、できるだけリラックスした雰囲気」で進行できることを心掛けている。またここでも初日は普段東京にいない地方会員のかたにできるだけ前に出ていただく事を心掛けた。会員出品者とも多数会場に残り、盛況だったと感じる。今年の研究会、皆さんご自分の作品について嬉しい評価、また何かしら有益なアドバイスが聞けたでしょうか？

両イベントにご参加くださった皆さんにこの場を借りて御礼申し上げます。

また今年度上半期に、研究部から全会員にむけて「会員出品者相互交流のためのイベント案」について意見を募ったが、まだこれといった具体的な提案は寄せられていない。展覧会委員会や事務局でこれまでに議論の俎上に載ったアイデアも含め、次年度はなんらかの形で具体的な提案が実現できないかと思っている。

会場研究会



巡回展報告

名古屋展

事務局 加藤 嘉巳

第53回主体美術名古屋展は、10月17日(火)～22日(日)までの6日間の日程で、愛知県美術館ギャラリーで開催されました。会期中は秋の長雨が続き、最終日は大型台風21号に襲われ、警報が発行される事態となりました。例年通り最終日の閉館後に搬出の事前準備を行いましたが、帰路が心配のため今年は早目に切り上げました。翌日は名鉄電車がストップして遠方の中部メンバーの方は来られなくなり、搬出作業が午前中に終了出来るかを心配しましたが、みなさんのがんばりもあって無事予定通りに終え、神戸へ送ることが出来ました。

名古屋展の展示につきましては、東京展の陳列をベースにした部屋別の配置図をもとに、東京事務所の皆様の応援と、中部メンバーや展示作業員の人達で作業を進めました。展示作品の大型化や、女性の多い中部メンバー、高齢化による体力の問題等で定められた所定時間内で作業が終了出来るか不安でしたが、昨年の反省を折り返し、作業別に細かく担当や責任者を決めたり、展示作業員の増員等の対策を進めた結果、予定より早目に作業が終わりほっと胸をなでおろしました。

主体美術東京展において企画展示として「森 芳雄没後20年」が行なわれたことに併せて、名古屋展においても特別展示として、名古屋画廊さんよりF80号「夏」とF10号「雑草のある風景」の作品をお借りして、「森 芳雄の言葉」を一緒に会場の入口に展示したところ、多くの皆様より非常に良かったという言葉をいただき実施した甲斐がありました。

入場者につきましては、特別展示を行いPR活動をして新聞社に記事を掲載してもらいましたが、前述の通りの悪天候のため、例年に



名古屋展
会場風景



比べて約25%少なく、全体の売上げも残念ながら減少してしまいました。本年は、地元出品者の中から2名が秀作作家となり2名とも会員に推挙されるなど、明るいニュースがありまして、これからの活躍と若々しい活力を大いに期待するものです。

非常に残念ではありますが、来年度の第54回主体美術名古屋展は、愛知県美術館が平成29年12月より1年間建物の改修を行い、ギャラリーが使用出来なくなりました。そのため、他の会場について、名古屋を中心としていろいろな方面で検討して来ましたが、結論として会場の確保がむずかしく、名古屋展を中止せざるを得なくなりましたので、よろしく願い申し上げます。

最後になりますが、本年もまた、遠方より会員の皆様がわざわざ名古屋まで足を運んでいただきましたことと、快く森 芳雄氏の貴重な作品をお貸し下さった名古屋画廊さんに、この場をお借りしてお礼申し上げます。
(2017年12月)

神戸展

事務局 森 慎司

第53回主体展神戸巡回展は原田の森ギャラリー1F及び2Fにおいて12月20日から24日まで五日間開催されました。関西での巡回展は例年京都市美術館2Fを会場としていましたが、美術館の改装に伴い初めて神戸での開催となり、会員および新人賞、佳作作家の受賞者、関西の出品者の作品が展示されました。

改装もないギャラリーは内装、照明などデザインが一新され、壁面も美しく移動壁面の自由度もあり、余裕のある満足のいく展示環境でした。2F会場には他会場にはないとても天井の高いスペースがあり展示上自由度を高める一因になっていて、展示作業をしていてもうれしい気分になれたと思います。これは来館者の皆さんにも好評で、作品の見栄えが良い、良い気分鑑賞できた等の感想が寄せられました。

秋からのリニューアルオープンということで、ギャラリーの日程の都合もあり、例年よりかなり遅い会期となり都美術館での本展と会期が離れ季節が例年と違い、1F2F会場をつなぐ観覧者の導線、1F2Fそれぞれに受付を置かねばならないこと、入場無料となり受付を外注しなかったことでの人員のやりくり等々、例年と違う段取りで多少の遺漏もありましたが、それも関係各位の力をお貸しいただいて大きなトラブルに発展しなかったことに感謝いたします。今後の教訓としたいと思っています。

問題点はほかにもあり、京都と比べギャラリー周辺の人通りが少なく一般客の入館があまり望めないことと、会場使用料が昨年に比べると30%アップとなり且つ規定で入場料を無料にせざるを得なくなり、図録ポストカードの販売もおおっぴらにはできず、これが少なくともあと2年続くとなると財務的にかなり困難な状況だと思います。特に自助努力で採算を取る工夫の余地が少なくなったことは、運営



神戸展
会場風景



的に今後のおおきな問題だと思っています。

展示作業は要領が違ふことで作業時間も多少伸び、撤収作業ともに54回展では工夫する必要や、それに伴って例年行っていた会場研究会が53回展では時間も設けられず、課題としておきたいとおもいます。

会員出品者各位による宣伝ご案内等のご尽力により遠方からの入場者も見え、この場を借りて謝意を述べたいと思います。

また今回展では地元でなじみのない神戸巡回展を多少なりとも盛り上げていく目的で、並行する形でアートホール神戸会場で「主体美術関西作家小品展」を併催しました。賛助出品の形で参加、ご助力下さった他地方の会員各位また関西関係の出品者には遠方から泊まりがけで展示や会場設営にご尽力いただき、ありがたく思っております。ありがとうございました。
(2017年12月)

第54回主体名古屋巡回展中止について

返町 勝治

名古屋展の会場である愛知県美術館ギャラリーが改修工事のため(今年度のみ)使用できず、名古屋展事務局が代替に名古屋市博物館を候補として検討を進めていましたが、申し込みの優先順位が(実績が無いので)低いことと、使用決定時期が展覧会会期の半年前ということで準備が間に合わない事がわかり、今年は中止する事になりました。

もう一つの巡回展である京都展も京都市美術館の工事で開催できず、昨年に続き原田の森ギャラリーで神戸展を行います。今年は会期が本展直後の9/21~24になりますので、第54回主体展は9月で終了することになります。

昨年11月の例会席上で他の地域で巡回展もしくはそれに準じた展覧会は出来ないかとの声上がり、急遽情報を集め検討したところ、仙台市の2会場が候補に挙がりました。

①**せんだいメディアテーク**は5階と6階に会場があり、どちらかのフロアが確保出来れば巡回展作品をそのまま展示できる広さがあります。

②**宮城県美術館県民ギャラリー**は会場が狭いため、主体展出品とは別の(50号以下程度)作品による展示になります。

巡回展は地元の会員や出品者の労力的、経済的な負担によって運営されているわけですが、仙台の場合は地元にはいませんので、会場費、運送費の他に搬入、展示、搬出や会期中の受け付けなど人件費がかかり、①の場合で200万円強、②でも150万円は必要と思われます。そこで会員にアンケートをお願いしたところ別表の結果になりました。

①の場合で $(31+41) \div 150 = 48\%$ の賛同者がありましたが、目安とした70%に届かず断念することになりました。ちなみに1月5日の時点で①の会場は10月後半に5階の2/3が空いていましたが、②の方は昨年12月下旬に申し込み期間が終了しました。

今後は一昨年に実施した研究部のアンケートなども参考に何らかの取り組みができれば将来に向けての展開につながるのではないかと考えます。

アンケート総数/150件 うち回収118人(78.7%)

内 容		はい(人)		いいえ(人)	無回答(人)
①	第54回主体展出品作によるせんだいメディアテークでの展覧会に参加できる	31	41	42	32
②	主体展出品作とは別作品による宮城県美術館での展覧会に参加できる		4		



惜別

野辺田紀子さんを悼む

中島 佳子



2017年7月逝去



「コンビナートの灯」(F130) 2016年 第52回主体展

野辺田さんは、数年に渡る闘病生活を送られ、入退院を繰り返しながらも、最後まで精力的に制作をされて来ました。

晩年、愛知県美術館での主体中部展に出品された30号程の作品だったでしょうか、ハッとする輝く灯を出現させていました。それは浄化された魂の光でした。今でも強烈に記憶しています。私は思わず彼女に「素晴らしい。」と伝え、本当にうれしそうに微笑み、「これは病院の院長先生にも褒められた作品なの。」と教えてくれました。

彼女は耳が不自由と云うハンデがあり、決して恵まれた人生ではありませんでした。しかし、中部での作品研究会の折には、たえず小さな筆談用の手帳を持ち、仲間の間を走り廻っておられた姿が目につきます。私共はその姿にとっても刺激されたものでした。主体に出品しながら通信教育で美術を学び、家庭では立派に子供さんを育て上げ、御主人は彼女の良き理解者でもありました。が、その御主人に数年前に先立たれてしまいました。彼女の悲しみは深く、様々な心労が重なり主体を辞

めたいとの手紙を私は受け取っていました。

しばらくして、持前の不屈精神で、以前以上に活発な制作活動を始められていました。そしてそれは、新たな出発を予感させる作品でした。耳の方も、不自由を感じさせない程、相手の口の動きで会話出来るように努力されてもいましたので、……その後体調を崩された時の心情を思うと言葉もありません。

松本竣介が好きだと以前話してくれました。彼女の絵は決して自己主張の強い絵ではありませんが、自分の正直な心の造形を求め、追求しようとされて来ました。その姿は竣介と共通していると思われます。入退院を繰り返しながらも、最後まで前向きに人生を生き、自らの絵に希望をたくし、新しい境地を切り拓こうと努力された姿は、私共に一つの灯を残されたと思います。しかしその背後には、御家族と、主体中部の仲間の支えが彼女の心の支えとなったことは間違いないことでしょう。

惜しい才能を悼みつつ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

野見山 暁治氏 講演 「森 芳雄の生きた時代」

はじめに

森芳雄没後20年となる今年、主体展会場に企画展示室を設け、合わせて野見山暁治氏にも講演をお願いしました。森芳雄氏の素顔を知らない方々のために、まず1956年に作成された自由美術の記録と主体レセプションでの森氏のスピーチ一部映像を8分間流しました。その後ほぼ1時間にわたり貴重なお話を伺うことができました。

ちょうど森さんは僕より上で一回り違い。森さんを「傭ぶ会」で何か話してくれと頼まれましたが、僕など語らなくてももっと親しい人がいるだろうと思って断った。ところが行ってみますと、時代は変わり、森さんを知っている作家はごそつといなくなり、大野五郎さんだけがポツンという、僕の顔見て「オー来たか」と喜んでいる。今になって色々語る事があったのに、あの時話しておけばよかったなぁと何度も思いました。ここにきて森さんのことは色々あったのに殆ど忘れていんです。今頃になってあわててどうしたらいいかなあと。今日、ここで、ご存じの方がこういうことがあったでしょう、とか、又そこは違うじゃないかということがあったら指摘して下さい。

自由美術に 生意気な奴がいる？

ある時、大野さんと西村さん等と銀座で飲んでいたら、自由美術に野見山と言う生意気な奴がいる、知っているかというから、「僕じゃないでしょうかねえ」と。僕は生意気に映ただろうと思う。僕が自由に

出したときは27歳、おそろおそろ持って行ったところが運よく初出品で賞をもらいまして同時に会員になりました。そうなりますと2年目には常連のような顔をしているものですから、結局うだつのあがない人達がアイツは生意気だということになったんだと思う。

それを私も気が付かないから麻生さんとか森さんと親しく一緒にいるんだ。ただ自由美術というところは絵描きに上下はないのだから、先生と呼ばないことになっている。だから一般出品者でも、森さんとか、さんづけで呼ぶんだと。ところが森さんは、自分で自分のことを森さんと言うんです。「森さんはなぁ」って言うから誰の事？ って、俺のことだよって(笑)。

ただ一般出品者の時、後ろで意地悪そうな人が並んでいる。井上長三郎って人はなんか長屋のオジサンみたいな人で、持ってきたのなら梱包してあるの早く解けと言うんですね。持ってきてすぐ、やけにパタパタ言うオジサンがいるなと思って、ところが開けて見せたら、君が描いたのか、すごいじゃないか、入選だ、と。そこに一人若い頃のピ



カソミみたいなダンディな人がいて森さんだった。

今、フィルム(講演前に上映)見たら老けて見えて、あの頃の男前が出なくて残念だなぁと思いました。森さんは、絵描きというのはこういうものだろうというような風貌を持っていました。だから、あのフランスから来た絵描きは誰だ? って思っていたら森さんだった。というのは森さんは自由美術の中では毛色が違う。

麻生三郎の「ひとり」に 衝撃! 受ける

私が何で自由美術に出たかという、戦争が終わって、ソ連の国境近くで病気になって帰され、終戦まで寝たり起きたり繰り返していたのです。これから日本は文化国家だから好きなように描いていいというおふれが出たんですね。非常に不思議に思われるでしょうけど、あの頃は、描くものに規制がありました。外出のときの服装まできまりがありましたから。好きに描いていいよと言われても、絵具もない、何もないのだから勝手にしろというだけのこと。

僕は九州の福岡県の人間で、すぐ東京に行きたかったのですが、その頃は六大都市というのは入ることができないのです。戦争から戻ってきましたと言っても東京都は受け入れてくれない。焼野原だからそこに人が集中して帰ってくると大変なパニックを起こすからです。だから六大都市は数年間入れなかった。

あるとき、軍が絵具を調達していたのが、もう各団体、自由に出発してよいということになったのです。ペラペラの美術雑誌に麻生三郎の「ひとり」という絵が載っていて

非常に感激しました。というのは僕が美術学校で絵とはこういうものだとかえられたのは後期印象派の流れをくむ黒田清輝の教えでした。ところが「ひとり」という絵を見たときに、絵の約束事で描いているのではない、今の世の中はこうだと出してきている。二人を描いていて題は「ひとり」そこに孤独感というのが滲んでいる、今の時代というものが如実に現れていました。

絵はこうなんだ、俺のぶつけたいものを描くのが絵なんだと初めて教わって、いてもたってもいられず横浜の保土ヶ谷というところに学生小屋を見つけて、いさせてもらい、そこから東京に絵を見に行くようになったのです。

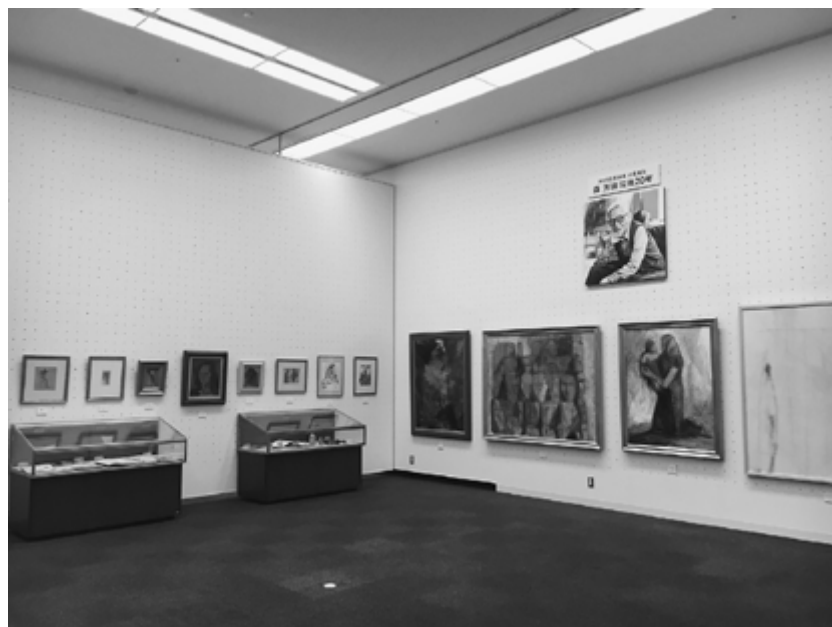
それから2年のうちに森さんの「二人」という絵が発表されました。人間を出さなきゃ絵じゃないよ、という新しい時代がきて非常に忘れられません。だから麻生さん、森さんのいた自由美術に出たことはとても幸福だと思っている。

権威を否定し、俺たちは 人間を描くんだよ

話が前後しますが、美術館には自由美術と同時に独立美術と一水会があり、自由美術は裏口からしか入れないちっぽけな団体だった。正面玄関は独立と一水会。だから、親分というのはいないんです。つまり、森芳雄さんでも40歳そこそこ。独立でも一水会でもキラ星のごとく重鎮がすでにいるわけですが、自由美術は誰もいない。

ちょうど私が入った年は松本竣介が亡くなった年で、遺作展示室が設けられておりました。皆、「竣介が亡くなったなぁ」と悲しんで作品を見ていたのを思い出します。松本竣介にしろ、その時代というのは





「俺たちは人間を描くんだよ」と目覚めたといいますか、今まで官展とか独立とか流派で美術団体が分かれていましたけど、自由美術は俺たちは人間だよなという結びつきでできていた感じです。

ですから森さん含め、井上長三郎、鶴岡政男や麻生三郎、村井正誠、山口薫と各派、各会の若い人達が集まってきたんです。なぜそうなったかと言うと、一匹狼といったら恰好いいですけど、親方のいうことを聞かない、早い話 各会で歯ざりしていた奴が集まって自由美術が形をなしてきた。これは面白いと自由美術に出したわけです。2年目だというのに長谷川三郎が陳列を君に任せるよ、と言う。私は誰が古参で誰が新しいのかもわからないのでできないと言ったら、わからないからいいんだよ。今にしてみると、そういったあたりかたは団体の未曾有の姿だったじゃないかと思います。

皆さん、こんな話聞いてて面白いですかあ?(会場笑い)

殴りあうほどに激しく問う、俺の表現とは何なのか

自由美術はせいぜい40代中心ですから、しょっちゅう集まって何でも皆で決めるんです。この近くの「韻松亭」でやるのですが、あぶれ者の集まりだから一致しない。そのうち喧嘩になる。会議の話じゃなく「オマエの絵はなんだ」とか言って。難波田龍起のところに行って麻生さんが「オマエの絵は豚の臓腑じゃないか」と。「俺はそれで結構だ」「いつまでも豚の臓腑を描くのか」とつっこい。そうなると「もう1回言ってみる」と掴み合いになるのです。みんな面白がって見てる。庭に出てやりだし雨が降っても殴

り合いは続く、止めようとしても「せっかくやっているのだからそのままにしておきましょう」と。私は27歳でしたから、これはまずいなと思ったのですが井上長三郎が「君な、こういうときは存分にやらせることになっているんだよ」と。

結局、雨の中ずっと見物していました。ヨレヨレの麻生三郎と一緒に帰ったことがあります。最初の会合でこれですからとんでもないところに来ちゃったなあと(笑い)。森さんも、そういう酔っ払いの仲間には入らない。慶應幼稚舎にいった人ですからニヒルな笑いを浮かべている。

戦争中は戦争画を描くかどうかの問題だったけど、戦後になると、これから生きていく拠り所として画面にどう自分を表現し、毎日毎日問いただしていかという課題が僕の中にあった。みんなそれぞれの画家の中にあったと思う。俺の表現とは何なのか、見つめていたと思う。自由美術はひとつのそんな拠り所だったから率直に絵について言い合っていたのだと思う。だから喧嘩にもなった。

サロン・ド・メイにより知ったヨーロッパ絵画の現在

戦後2、3年目でしたが毎日新聞社主催でサロン・ド・メイというのが日本に入ってきて、初めて僕らはヨーロッパの画家が今どんな絵を描いているか現物を見ることができた。鎖国状態からパツと開かれた。僕らが追い求めている人間性というものを、苦渋をにじませ表現している。戦前見ないような千差万別の絵画を初めて見せつけられました。世の中に対して鬱積し反発したような人間が自然と向かい合っているような力強いけど哀しいよう

な人間を描いた作品やら、ビュッフェのようにまるで牢獄のような冷たい線ばかりの中で骨だけの人間がつたっている絵。その頃サロン・ド・メイにはとてもいい絵がありました。

サロン・ド・メイは日本の作家を紹介することになりましたが、これは新しい時代の登竜門ともいえるものでした。自由から森さんと麻生さん山口薫、新制作では脇田和とか、10人位選ばれました。森さんはすでに「二人」を発表していて評判になっていました。自由美術で発表したときは階段の下の薄暗いところに飾られていましたから、あんなところでもいいのかなと思いましたね。というのは、もともと森さんの絵はなんとなく薄暗い。それが紀伊國屋で買い上げられて、森さんもようやく浮かび上がってきた。

しかしサロン・ド・メイに100号出すことになっても、キャンバス買うお金もない。「絵具屋には後で返すということで借りられないだろうか」と頼まれ、行って話したら「森芳雄には貸さない」と言われてしまい

ました。そのことを伝えると「そうだろうなあ、俺も返す宛てもないから」と。「森さん6号の絵が売れたんじゃないですか」と言ったら、その日のうちに画廊の小僧が返しに来た、「その画廊インチキじゃないんですか」と言ったら「オマエさん、それが日動だよ」と。

昔は皆貧乏でしたが、森芳雄さんは貴公子然としていたので、ボロ着ていると何だか気の毒になってしまう。鶴岡政男がボロ着ていてもそれは当たり前みたいなものですが。戦争が終わって軍が使っていた外套が安く出回り、森さんはいつまでもそれを着ていましたね。

森芳雄の造形、そして…

森さんが「二人」を発表する前に、夏、たまたま訪ねて行ったことがあるのです。キャンバスの面に紙が貼ってあり、もうきちゃんと「二人」のデッサンができあがっていました。「どうだ? お前思ったことをちゃんとええよ」と言われたのを覚えています。



◀「二人」(F100)1950年

私がパリから戻ってきたのは東京オリンピックが始まるという夏でした。久しぶりに森さんに会い、帰りはタクシーで、と言うので「森さんタクシーは高いですよ」と言いましたら「今はな、森さんもタクシーに乗れるんだよ」と。私はパリに行く前の森さんしか知らないから信用しないんですね。「それはお前が払えよ」と言われるんじゃないかと思い「本当に森さんお金あるんですか」「あるよ」と問答が続きました。

森さんは、そう長くはないパリの生活から、フィレンツェにあるマサッチオに限らずアッシジのジオットの造形性というかな、壁にフレスコで描かれた油絵以前の絵を、いちはやく身につけたんじゃないか、つまり造形の中の人間ということではなかった当時の日本の油絵の中に、人間とはこういうものだというモニュマンみたいなものを発見したのではないか、私はそれに非常に感心したんですけど。

日本人の絵というのは情景の中に人物描けばいいのだが森さんの絵は人物だけなんです。裸というのも当時は日本人にはあまり馴染まない。親子なども造形的にとらえているものと、何となく、その中で人間関係が絵肌に溶け込んで

いるものがある。今にして思うと「二人」という絵について、そこに至るまでの経路を聞いてみたかった。たとえば画家が自分の娘を描くときに、自分の娘として見つめるのか、子どもの形としてとらえるのか。森さんの絵はその二つがきちっと重なっている。

当時、人間のモニュマンとしては松本竣介の自画像などもあるが、それぞれが人間を追究した稀有な時代だった。もう2度とあの時代は返ってこない。

私は日本に帰ってきたとき、自由美術に連絡するため事務所はどこだと小野木学という自由美術の若い画家に言ったら「自由美術は今真二つに分かれているんですよ。どっちに行くんですか」と言う。帰ったばかりでわからない、面倒だからそのままにしていた。井上さんは自由美術なんだから戻ってくるのは当然だろう、と言いましたが、森さんは「そんなのほっとけばいいんだ、どっちでもいいんだよ」と言いましたね。それ以前は自由からモダンアートに流れていった人もいて淋しい思いがしましたが、帰ったら、自由は主体美術と分かれて、私はとても悲しかったですね。僕の帰るところが無くなった。

今日は生き残りの人間として何でも知っていることは話そうと思って来ました。最後に何か聞きたいことがあれば答えます。

Q 「400字のデッサン」にも気骨のある画家、絵描きが絵描きらしかった時代のことが書かれています。僕はその時代に生きたかったなと思ったりもしますが、若者も含め、今の絵描きの姿はどう見えるのでしょうか。 (山本靖久)

もう今は絵描きはいなくなりました。というのはね、今は人間がどうあるべきか、画面にどう表現するか、そういう絵が世の中に出てきたら煩わしいと思うだろう。いわゆるポスターみたいな快い絵じゃないか。

たとえば以前の絵を今持ってきて、これをずっと見つめるのがしんどいな、というようなことになる。一目見てわからないようなものの中にってしまったと思うのです。「ものを見る」ということが今の世の中なくなっている。これだけ、すべての人が早いスピードの中で生き、もう絵を見るということが、不在じゃないかと思うのです。

森さんや麻生さんの家に時々遊びに行っていましたけど、麻生さんなど火鉢しかない寒い部屋で奥さん裸にして描いている。奥さんもよく耐えていたと思うし、あんなにまでして絵描きは絵を描くのかと思ったものです。時々僕もそこで一緒に食事をしましたけど。子どももいましたね。つまりね、俺たちはそうしてでも絵を描くんだという姿勢ね。

私は藝大の教師になって学生たちに必死に、こういうことやっていても絵描きにはなれないよと言うと「私たちは絵描きになろうと思ってここにきていません」と言うの。じゃどうするかと聞くと「ここを出たということで得られる職業を選びます」と。絵描きになる人はいないのかと言うと誰も手を挙げなかった。そうまでして苦しい生活を何でしなきゃならないか、人並みの生活がしたい。冬は暖房もないと困る、絵を描くためなら暖房もいらないなんていうのはいいない。

私は翌日から学校に行く気がしなくなった。もう今や昔の画家のありようはロマンチズムでしかない。絵描きはいなくなったのではないでしょうかね。

講演会を終えて



海外、国内あふれる情報が簡単に手に入る現在と違い、ペラペラの美術雑誌に載っていた麻生三郎の「ひとり」に感激し自由美術に応募した野見山暁治氏。1枚の絵を見る、見続ける、己の存在をかけ絵に向き合う、生きる。“今は早いスピードの中で、絵を見ることが不在じゃないか”という言葉は印象的でした。「森芳雄の生きた時代」を語っていただく中で、主体美術が創立以来大事にしてきた精神が浮き彫りにされてきたように思いました。53年たった今、それがなし崩しにならないために改めて森芳雄氏の厳しい姿勢、言葉には学ぶべきものが大きいと思いました。

野見山氏には、わざわざ九州から主体の講演のためだけにいらしていただき感謝の念に堪えません。心に突き刺さる言葉がいくつもあり充実した1時間でした。

(研究部／榎本香菜子)

森 芳雄の言葉

私は自分を「町工場のおやじ」だと思っている。そんなに壮大な完成品は作れないけれど、間違いのない品質の部品だけは作っていきたい。

若いころパリでおつき合いをしていたハンガリーの画家がこういことをいった。「絵の仕事にはエスプリ(精神、機智)をもて、そして常にクリエイティブ(創造的)であれ」そして「イミテーションはいけない」と何度もいっていた。この言葉は今も私のどこかに生きつづけている。エスプリというフランス語は日本語に訳しにくい「気韻生動」とでもいったらいいだろうか。

私が油絵に惹かれたのは「動き」のため、動きがあるということ。ある瞬間の動作を永遠のフォルムの中に入れている。

私は一生かかって美への憧れに向かって歩いている。絵かきはそれを口で規定することはできないのだ。創作者は、文章なり言葉で表現すると失敗する。言ったことが逆に私を縛ることになる。

私の画生活と、油絵とデッサンとの関係は、ちょうどレールとマクラ木を支える小石の様なものであります。上手、下手、良い悪いというものでなく、どんな小さな一片でも、私の油絵を進めて今日迄に至る大切な要素です。小石ひとつ取り出してみても何の価値もないでしょう。けれどそれ等がレールを支える様に、これから私の仕事を支えて行くと思います。

人間として、絵を描く《制作する》行為の中には、本人が意識すると否にかかわらず、心と頭と手が密接に関係します。言いかえると、○喜び、感情、○造型、智性、○技巧、技術、此の三者が相互に生き生きと交わり合う時に、初めて作品に生命が与えられるものと思います。

技巧的に下手でも、生きている絵がある。上手に丁寧に仕上げてあっても、つまらん絵がある。欠陥を追求して行くと、長所に転じて個性になって、それが作品の魅力になるんだ。そこ迄やらなくちゃ本物の絵描きじゃないよ。

色彩のコントラストとハーモニー、それとリズム。画面の上でそれが表現できたらと思う。人間の生活には、表に出る明るい面と、裏側の暗い面がどうしてもあるんだ。明るさの裏にある暗さをどう明るさの中にとり込めるか、それが問題なんだね。

このままで良いんだ。
これ以上描くことはない。

父・森 芳雄のこと

2017年12月

門田 正子

父の遺作、遺品を展示していただいた会場へ一歩足を踏み入れた時の感動は、今も忘れられません。

アトリエに遺されていた画集以外の蔵書に、バルザックの“知られざる傑作”や“ヴェルレーヌ詩集”がありました。ページを繰ると、父が記入したと思われる○印や傍線が何箇所もあり、読んでみると、父の画家としての姿勢や人生観が重なりました。会場では、作品とともに、前述の書物に心を寄せた画家・森芳雄の世界を感じることができました。

野見山先生の講演も大変面白く、戦後、経済的に困窮する中、画家達が絵画への情熱をお互いにぶつけ合っていた様子が伝わってまいりました。そのような交流の中から、戦後美術界を担う画家達が生まれたこと、再認識致しました。

雨漏りのひどい茅屋でしたが、部屋数だけはあった西原の家に、先生達が各々作品を持って集まり、談論風発……野見山先生のお話につながる雰囲気があったこと、私自身の幼少時の記憶として残っています。企画展と野見山先生講演会を実現してくださったこと、改めて御礼申し上げます。

キャンバスに向かい絵筆を走らせ、或いは画集を眺めデッサンをしている時の父は、とても楽しそうでした。旅行やドライブに出掛ける時は、必ずスケッチブックを持って行きました。旅先の写真には、スケッチブック片手に、風景を描きとっている父の姿が多く写っています。“これはここで止めておこう”と筆を止めサインを入れる時もあれば、“どうにもならんね、暫く置いておこう”とイーゼルから降ろし、裏返しにしてしまうこともありました。いずれの判断も、私にはサッパリわかりませんでした。



▲西原にて(左から、塚谷、小谷、正子10歳、芳雄)

バラの花を描いている時、“ここに赤い花があると良いんだが…”と言いながら、仲々画面が動かない時もありました。私は心の中で、“そう思うなら、さっさと赤い花を描けば良いのに…”と思いながら見ていました。父にとってキャンパスの中の世界は、誰にも邪魔されることのない自由な世界でした。

父同様に、絵筆を持つ喜びを知っている皆様に羨ましく思います。皆様の作品が次世代の方々への発信源となり、主体展が今後とも発展していくことを願って止みません。



▲世田谷美術館にて、作品修復作業見学 1997年



▲高島屋個展 1989年



▲回顧展 芳雄と正子 1991年



▲倉敷・大原美術館へ

2017 NEW MEMBER 新会員紹介

第53回主体展にて会員に推挙された5名の方のプロフィールです。
自作について語っていただきました。

伊藤 吉一 Yoshikazu Itou

■生年月日

1947年2月22日

■出身地 愛知県

■制作に使う主な素材

油絵具、アクリル絵具



「ヤブツバキの森・春」 M200

■自作について

故郷、常滑の神社裏山のヤブツバキの森。そこは昼でも暗くて少し怖いところでしたが、小学校から戻ると「すみか」を作ったり、花の蜜を舐めたり夢中で遊んでいた。今では街はすっかり変わったがヤブツバキの森は静かで昔と変わらない。薄暗く葉の隙間から覗く空や、幹に注ぐ光、様々な色の美しさに感動する自分と少年時代の少し怖くても楽しかった記憶を表現したいとキャンバスに向かいます。5年前からこのテーマで制作しているが、まだ答えが得られない。

高澤 信 Nobu Takazawa

■生年月日

1936年6月7日

■出身地 東京都

■制作に使う主な素材

キャンバス、アクリル、油絵具



「辿る」 F100

■自作について

48回展から出品し、53回展にして得た会員資格。正直、嬉しさ半分でした。加齢に反し体力は下降線を辿り、キャンバスに向かうも眺めることが多く、徒に時を費やし、自問自答しながら描いた作品です。何時の間にか、これからの自分が映し出されている様な作品になっており、驚いております。永久に辿り着くことの出来ないこの道、これからは少し楽しみを交え、素直にキャンバスに向かえるように致したいと思っております。

長澤 弘美 Hiromi Nagasawa

■生年月日 1956年5月19日生

■出身地 東京都

■制作に使う主な素材

キャンバス、油絵具



「HOME (ハババはまだ?)」 F130

■自作について

林立するマンション群の一室に、もう25年も暮らしています。夕刻になると窓に明かりが灯ります。煌々と白い窓、ぼんやりとオレンジの窓、あるいは真っ暗だったり、本当に色々です。その部屋1つ1つに、そこで暮らす人々の人生が垣間見えるようでおもしろいです。そしてマンション全体で見るととても美しい。

私が描きたいのは、普通の人々の普通の生活の尊さです。日々を一生懸命生きる人の心の琴線に触れる作品を、描いていきたいです。

本郷 梨衣 Rie Hongou

■生年月日 1977年
■出身地 愛知県
■制作に使う主な素材
アクリル絵具



■自作について

何かを透して、ものをみつめてみると、そのものをもっと知ることができ、冷静に今を感じ、表現できるのではないかと考え、試行錯誤しながら、作品制作に取り組んでいます。

絵を描くことが、子供の頃から好きで、社会人になっても、やっぱり描くことが好きで、気がついたらどっぷりはまっていました。スロースタートで勉強の日々ですが、表現者としての自覚を持って、精進していきたいと思えます。よろしく願いいたします。

「あなたからみたわたし」 F130



八田 真太郎

Shintaro Yada

■生年月日 1965年6月10日
■出身地 埼玉県
■制作に使う主な素材
アクリル絵具と油絵具の併用



■自作について

ミメーシス(現実の模倣)をテーマとしています。



「ミメーシス／行為の堆積・情報の抽出／201103牡鹿半島 b」 182×230cm

第53回主体展入賞者

秀作作家 7名

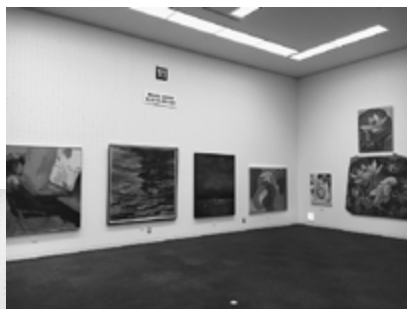
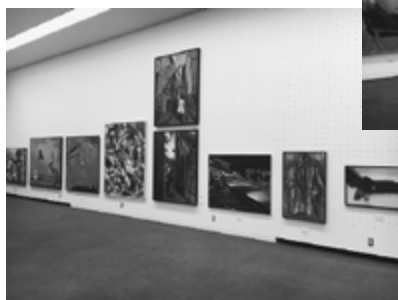
伊藤 吉一(愛知県)
高澤 信(東京都)
長崎 羊子(神奈川県)
長澤 弘美(神奈川県)
福田 和幸(千葉県)
本郷 梨衣(愛知県)
八田真太郎(埼玉県)

佳作作家 18名

足立 晋平(京都府)
池田 正子(北海道)
猪熊 修(山形県)
上野 信彦(東京都)
大澤 政和(長野県)
大西 佐頼(埼玉県)
落合 梨乃(千葉県)
金沢 綾子(神奈川県)
川口佳緒里(埼玉県)
菊地 史津(東京都)
小林 惇子(京都府)
瀧安 順子(広島県)
丹澤 陽子(神奈川県)
戸田 礼子(東京都)
細矢恵美子(神奈川県)
前山 陽子(東京都)
松尾 陽子(京都府)
室井 美穂(東京都)

損保ジャパン 日本興亜美術財団賞 1名

原田 文子(千葉県)



新人賞 2名

川口佳緒里(埼玉県)
室井 美穂(東京都)



室井美穂「雨の日」 P120



川口佳緒里
「夜と鑿跡のモチーフ」
124×77cm

新人賞受賞者からのコメント

川口佳緒里

この度は、第53回主体展におきまして新人賞を頂き、誠にありがとうございました。

私は現在、木を扱った彫刻の制作を行っております。今回は彫刻の絵画的表現をテーマとして、2点のレリーフを出品し、キャンバスに見立てた木材の中での空間表現の試みをいたしました。彫刻における現実的な鑿跡での空間表現と、絵画における仮想空間での空間表現の違いに大変苦労しながら、現実的な仮想空間を、ひとつの絵(あるいは彫刻)として成り立たせることができたのではないかと思っております。

展 覧 会 記 録

2017年9月～2018年1月末

■岩井啓二展

2017年8月1日～2018年7月31日
はまゆう山荘(群馬県高崎市)
■夢想と断想のイメージ(山本靖久 他)
8月26日～9月3日
Bunkamura Gallery(渋谷区道玄坂2)

■大村連展

9月2日～10月29日
朝日美術館(長野県東筑摩郡朝日村)
■金オーロ遊び展(種倉紀昭 他)
9月3日～9月26日
アトスペース泉(福島県いわき市)

■和田貴子展

9月4日～9月9日
画廊宮坂(銀座7)
■第39回北海道ロビー展
(佐藤善勇、續橋守 他)
9月8日～9月17日
ギャラリー絵夢(新宿3)

■第39回墨展2017 ―今日の表現―

(柏木喜久子 他)
9月10日～9月20日
好文画廊(日本橋浜町2)
■exhibition twice up! part 1
(久我英輔、坪井健一、新島知夏)
9月11日～9月17日
あかね画廊(銀座4)

■吉江新二遺作展

10月6日～10月29日
TS4312(新宿区四谷3)

■水村喜一郎絵画展

10月7日～25日
みやこ美術(長野県茅野市)

■柿崎覚油絵展

10月12日～10月18日
渋谷東急本店8階美術画廊
(渋谷区道玄坂2)

■一ORIGIN・アフリカー 小野由紀子展

10月13日～12月8日
しずしんギャラリー「ゆめ空間」(静岡市)

■草莽の風展(松本恵美 他)

10月16日～10月21日
ギャラリーアーチストスペース(銀座6)

■三人展(込町勝治、野口義博、畠 理弘)

10月17日～9月29日
水村喜一郎美術館(長野県東御市)
■EXHIBITION by ZERO!
(井上樹里、柿崎覚、坪井健一、中嶋修、新島知夏、橋本礼奈、山本靖久、結城智子 他)
10月23日～10月29日
あかね画廊(銀座4)

※展覧会案内状を機関紙担当、ホームページ担当にお送りください。
(会員・出品者問わず掲載いたします)

2018年度事務局体制

■責任者／福田玲子 ■会計／齋藤典久
■展覧会／込町勝治・結城智子・園田雅俊 ■研究／榎本香菜子・井上樹里
■広報／【図録・出版】桑原雄一・久我英輔 【機関紙】藤田俊哉・山田礼二
【発送】柿崎 覚 【広告】黒川 洋
■巡回展／名古屋：加藤嘉巳 神戸：森 慎司 ■ホームページ／長沢晋一

2018年第54回主体展

本 展／東京都美術館(上野公園)
2018年9月1日(土)～9月17日(月)16日間(3日は休館)
公募撤入／2018年8月22日(水)・23日(木)東京都美術館地下室
※巡回展、研究会等詳細はホームページにて。

■山本靖久展 一生あるものたちへー

10月23日～11月1日
四季彩舎(京橋2)
■象の内・外 2017(長沢晋一 他)
10月23日～11月1日
ギャラリー絵夢(新宿3)

■第2次フェノメナ展'17

(柏木喜久子 他)
10月30日～11月4日
ギャラリー風(銀座8)

■廣瀬栄子・斎藤孝恵二人展

10月30日～11月4日
画廊るたん(銀座6)

■ガリ展(山内暉子 他)

10月30日～11月5日
ギャラリーあづま(銀座5)

■ART SELECTION 2017

(齋藤典久 他)
11月3日～11月14日
わたなべ画廊(飯能市)

■〈風土〉に生きる・IV(柏木喜久子 他)

11月6日～11月11日
ギャラリー風(銀座8)

■園田雅俊展

11月6日～11月11日
ギャラリー・オカベ(銀座4)
■「時のかたち」より小品展
(中嶋修、結城智子 他)

■第31回NHKチャリティー展

(オノ・ミチヒロ、藤田俊哉 他)
11月8日～11月14日
名古屋米三越7階美術画廊(名古屋市)

■2017CAFネビュラ展

(長沢晋一 他)
11月8日～11月19日
埼玉県立近代美術館

■第31回NHKチャリティー展

(オノ・ミチヒロ、藤田俊哉 他)
11月8日～11月14日
名古屋米三越7階美術画廊(名古屋市)

■末松正樹展

11月11日～11月23日
鎌倉ドゥローイング・ギャラリー

■榎本香菜子展

11月13日～11月18日
シロタ画廊(銀座7)

■長尾和の旅と絵

11月14日～2月4日
BBプラザ美術館(神戸市灘区)

■佐藤善勇個展

11月18日～11月26日
ギャラリーランクスアイ
(品川区上大崎2)

■VENUS Exhibition(松本恵美 他)

11月20日～12月2日
ギャラリーセイコウドウ(銀座1)

■鳩貝悦子展

11月20日～11月25日
ギャラリー・オカベ(銀座4)

■込町勝治・勢津子2人展

11月21日～11月26日
ざらりー遊(赤羽西1)

■女の仕事展8th

(柴田かよ子、水谷幸子、水野博子 他)
11月21日～11月26日
愛知県美術館ギャラリー

■浅野修の世界展(虚と実)

11月22日～12月3日
鎌倉 夢松洞(鎌倉市小町)
■「内在する日常展」V(荒木篤子 他)

■「内在する日常展」V(荒木篤子 他)

11月23日～11月28日
アトスペース88(国立市)

■ニューフェーズ展(保坂淳 他)

11月23日～11月28日
画廊ジュライ(千葉市中央区)

■第5回共立玄木会展

(神保宏嗣、中城芳裕、井上樹里、須賀友里恵、金沢綾子、高倉愛、竹越夏子、北村奈美、津田テリ直美 他)
11月27日～12月2日
文法房堂ギャラリー(神田神保町1)

■井上樹里・山田ちさと二人展

11月27日～12月3日
あかね画廊(銀座4)

■第30回多摩北部5市美術家展

(桑原雄一、小松博映、森田六男 他)
11月28日～12月3日
清瀬市郷土博物館ギャラリー
(清瀬市上清戸)

■6人展(原澤泰子、藤原アツ 他)

11月29日～12月5日
鶴見画廊(横浜市鶴見区)

■華展(松本恵美 他)

12月4日～12月9日
ギャラリー風(銀座8)

■色か・色と・色を語る展

(江原美雪 他)
12月4日～12月9日
ギャラリーGK(銀座6)

■第4回ボールペンアート展

(高橋玲奈 他)
12月4日～12月10日
ギャラリーStage-1(銀座1)

■井口淳子展

12月12日～12月17日
ギャラリー宇(千葉県松戸市)

■彩展(原澤泰子、藤原アツ 他)

12月12日～12月18日
アトスペース イワブチ
(横浜市西区)

■2017主体関西作家小品展

12月21日～12月26日
アートホール神戸
(兵庫県学校厚生会館)

■大口満絵画展

12月23日～12月27日
京都教育文化センター
(京都市左京区)

■白田貞夫の聞いた足音

一追悼展(榎本香菜子、他)
12月25日～12月26日
シロタ画廊(銀座7)

■新春ガラス絵展(浅野修、中城芳裕、中村輝行、松井豊 他)

1月8日～1月13日
ざらりーサムホール(銀座7)

■燐々展

(有馬久二、佐藤善勇、手塚國彦)
1月8日～1月14日
銀座アートホール1F(銀座8)

■山口長男・野見山曉治と実専展

(長沢晋一 他)
1月8日～1月14日
ギャラリームサシ(銀座1)

■笑門来福 中嶋修個展

1月13日～2月4日
OMONMA TENT(取手市小文間)

■現代茨城作家美術展(福田玲子 他)

1月20日～2月12日
茨城県近代美術館

■米子美術家協会70年のあゆみ

(泉幹夫、今出茂徳、竹安堯文、田中良一、中村芳雄、前田進、安田富徳、八橋誠滋 他)
1月21日～2月18日
米子市美術館

■白黒展(長沢晋一 他)

1月22日～1月27日
ギャラリー風(銀座8)

■Re Born展(榎本香菜子、續橋守、水戸部千鶴、結城智子 他)

1月22日～1月28日
画廊 楽 I&II

■オノ・ミチヒロ展

1月24日～1月28日
三重画廊(三重県津市)

■長沢晋一展

1月29日～2月3日
あらかわ画廊(銀座1)

■第2回M-art'79展(山崎弘 他)

1月29日～2月3日
画廊宮坂(銀座7)

お知らせ

自由と平和のための東京藝術大学有志の会による「芸術と憲法を考える連続講座」というイベントが昨年末から開かれています。月1回ペースで、多彩なアーティストや言論人、第一線の研究者などにご登壇いただき地道な学習会を重ねて行くものです。興味のある方は以下のサイトを御覧ください。

<https://www.peace-geidai.com/>

編 集 後 記

森芳雄氏の特別展示の看守をやりました。氏の作品と向い合って座った数時間は貴重な体験でした。観覧者にも大変好評で、中には森氏の言葉をすべてメモって帰られた方もいたそうです(今号にすべて掲載しています)。野見山氏の講演会も、門田氏の寄稿も今号の内容は記念に残るものになったと思います。今年から事務局体制も大きく変わり、若手の会員が増えました。機関紙もますます読みごたえのある内容を検討します。ご意見ご感想をお寄せ下さい。(山田)